



Title	地域資源としての文化財とツーリズム
Author(s)	吉原, 秀喜
Description	セッション1: パブリック考古学の可能性
Relation	先住民文化遺産とツーリズム : 北海道の可能性(International Symposium: Indigenous Heritage and Tourism - Potential in Hokkaido). 2012年10月13日-14日. 北海道大学学術交流会館小講堂, 札幌市.
Issue Date	2012-10-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51246
Type	conference presentation
File Information	session1report3.pdf



International symposium 2012 Indigenous Cultural Heritage and Tourism

国際シンポジウム
先住民文化遺産とツーリズム
－北海道の可能性－

『地域資源としての文化財とツーリズム』

吉原 秀喜

(平取町役場アイヌ文化環境調査保全係)

《シンポジウム「先住民文化遺産とツーリズム」》
「地域資源としての文化財とツーリズム」

2012-10-14
吉原秀喜
YOSHIHARA HIDEKI



kanto orwa yakusakno arankep sinep ka isam

天から役割なしに降ろされたものは一つもない



【報告の趣旨】 *配布資料参照

この報告「地域資源としての文化財とツーリズム」(吉原)と、次の報告「文化環境保全調査の成果を活かしたヘリテージツアー」(長野/木村/川島)は、どちらも日高地方平取地域における取組をベースとしており、同じ「アイヌ文化環境保全対策事業」に従事しているスタッフによる一連のものです。前者(当報告)では、1970年代以降の平取地域での文化財に関する行政施策と住民活動の推移を俯瞰し、それらとツーリズムの相関について述べます。後者(次報告)は、調査スタッフが業務の一環として、あるいは地域の文化団体の一員として試みた普及・交流活動やツアーガイドの具体的事例を紹介しながら、ツーリズムの意義と可能性、課題を示そうとするものです。

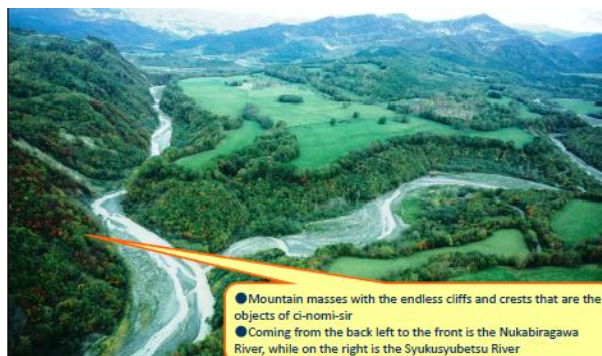
二つの報告に共通しているのは、ヘリテージツーリズムを、経済活動である以上に「最も重要な文化交流の手段」(山村高淑2012)と意義づけていることです。また、ツーリズムとの相互作用によって、基盤となっている調査活動をはじめとするコミュニティの多様な取組自体の拡充を図ろうとする指向性も共有しています。さらに、昨年度開催された連続的な国際シンポジウム「北方のツーリズムと景観」(調査室2011a)及び「先住民民族と教育」(調査室2011a)において行った、今回と同様な発表者の組み合わせによる報告で提示した次のような問題意識と論述(省略)を引きついでおり、継続的に深めようとしているということも、シンポジウム参加者の方々にご理解・ご留意いただきたい点です。





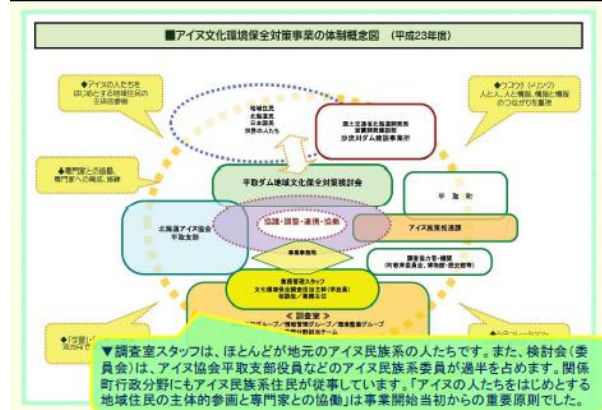
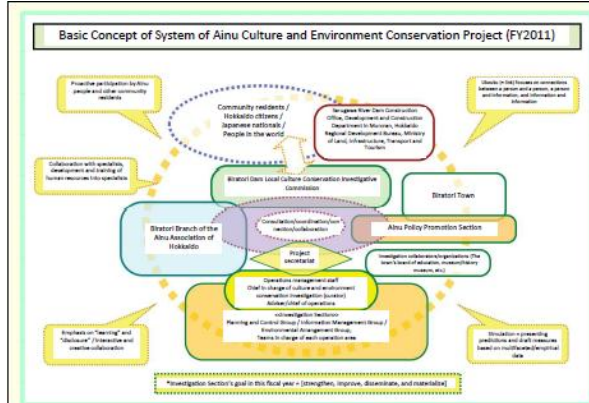
◆ Looking at the upstream of Nukabira river from the Nuoi-honson village

Photo by YOSHIMASA (300714)



【Figure】 Peteucopi

— The place where the rivers diverge from each other. (*Mashiho Chiri*, linguists) —



●1 アイヌ関係文化財をめぐる取組の推移



■ アイヌ関係文化財をめぐる取組の推移

——平取地域の場合:1970年代より

- ▼1970年代 民族の歴史・文化に対する再認識
〈例〉二風谷アイヌ文化資料館の開館1972/二風谷イヨマンテ1977
 - ▼1980年代 「伝統を守り、未来に受け継ぐ」
〈例〉アイヌ古式舞踊の国重要民俗文化財指定1984
ユオイチャシ・ボロモイチャシ・二風谷遺跡発掘調査1983〜(報告書)1986
 - ▼1990年代 「アイヌ伝統文化の今日の継承」
〈例〉平取町アイヌ文化アイヌ文化博物館の開館1992/二風谷ダム裁判判決1997/アイヌ文化振興法制定・施行1997/沙流川歴史館開館1998
 - ▼2000年代 「アイヌの人たちをはじめとする地域住民の主体的参画と
専門家との協働」
〈例〉アイヌ文化環境保全調査2003/イオル整備事業の着手2008
 - ▼2010年代 「アイヌ文化継承・振興の展開と深化」
〈例〉平取町アイヌ文化振興基本計画の策定2010
町内国定民族・文化に関する「21世紀・アイヌ文化に森の森」プロジェクト始動2012
- ※現代のアイヌ林・文化をめぐる動きの各事例に、先駆的な取組事例を提示してきた。

●2 文化財を地域資源として活かす試みとツーリズム



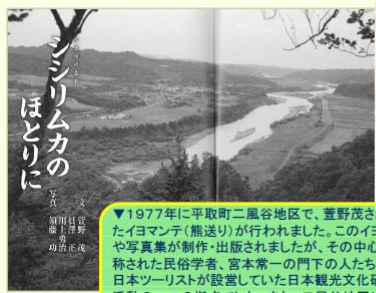
▼各時期ごとに、象徴的だったり、画期的だったりするできごとをく>にあげています。時間の関係上、それぞれの期に一つずつ取り上げ、その意義やツーリズムとの関わりについて述べるようにします。

- ▼1970年代 民族の歴史・文化に対する再認識
 - <例> 二風谷アイヌ文化資料館の開館1972/二風谷イヨマンテ1977
- ▼1980年代 「伝統を守り、未来に受け継ぐ」
 - <例> アイヌ古式舞踊の国重要無形民俗文化財指定1984
 - ユオイチャシ・ポロモイチャシ・二風谷遺跡発掘調査1983～(報告書)1986
- ▼1990年代 「アイヌ伝統文化の今日的継承」
 - <例> 平取町立二風谷アイヌ文化博物館の開館1992/二風谷ダム裁判判決1997/アイヌ文化振興法制定・施行1997/沙流川歴史館開館1998
- ▼2000年代 「アイヌの人たちをはじめとする地域住民の主体的参画と専門家との協働」
 - <例> アイヌ文化環境保全調査2003/イオル整備事業の着手2008
- ▼2010年代 「アイヌ文化継承・振興の展開と深化」
 - <例> 平取町アイヌ文化振興基本計画の策定2010
 - 町内国有林に関する「21世紀・アイヌ文化伝承の森」プロジェクト始動2012

※現代のアイヌ民族・文化をめぐる動きの各時期に、先駆的な取組事例を提示してきた。

▼1970年代 民族の歴史・文化に対する再認識

<例> 二風谷イヨマンテ1977



▼1977年に平取町二風谷地区で、萱野茂さんの指導のもと、古式にのっとったイヨマンテ(熊送り)が行われました。このイヨマンテをもとに秀逸な記録映画や写真集が制作・出版されましたが、その中心となったのは、「旅する巨人」と称された民俗学者、宮本常一の門下の人たちでした。当時、旅行会社の近畿日本ツーリストが経営していた日本観光文化研究所は、民俗学的な調査・研究活動の一つの拠点でした。また、二風谷地区におけるこうした取組の背景には、1960年代から70年代にかけての観光業の隆盛がありました。

▼1980年代 「伝統を守り、未来に受け継ぐ」

<例> アイヌ古式舞踊の国重要無形民俗文化財指定1984



▼文化庁により「北海道アイヌ古式舞踊」が重要無形民俗文化財に指定されたことはアイヌ民族・文化をめぐる状況に大きな変化をもたらしました。“やがて失われるから貴重”といったパラダイムが転換していく契機となり、若い世代へと継承されるものとなりました。保存会などでは、各地に出向いたり、集ったりする公演ツアーが活動の一つの柱となっています。

▼スタートして間もない平取町立二風谷アイヌ文化博物館が力を注いだことの一つは、工芸の振興でした。作品の制作それ自体を再活性化すること、工芸技術を活かした体験学習の開発・普及は並行して進みました。「文化遺産とツーリズムの相互作用」の、良い事例と言えるのではないのでしょうか。



▼1990年代 「アイヌ伝統文化の今日的継承」

<例> 平取町立二風谷アイヌ文化博物館の開館1992

▼2000年代 「アイヌの人たちをはじめとする地域住民の主体的参画と専門家との協働」

<例> イオル整備事業の着手2008



▼伝統的生活空間(イオル)の整備事業は、いま老町と平取町で進められており、次には札幌市と新ひだか町で着手されようとしています。平取の場合、森林・水辺・集落の3つの空間整備が軸となり、文化継承・普及のための活動も多様に組み合わされています。再現されたコタンでは、「ユカラ」と語りつづいていく活動が週末ごとに開かれています。一方、観光客や行政関係の視察などの来訪者も増えてきています。

●3 重要な地域資源としての遺跡・埋蔵文化財



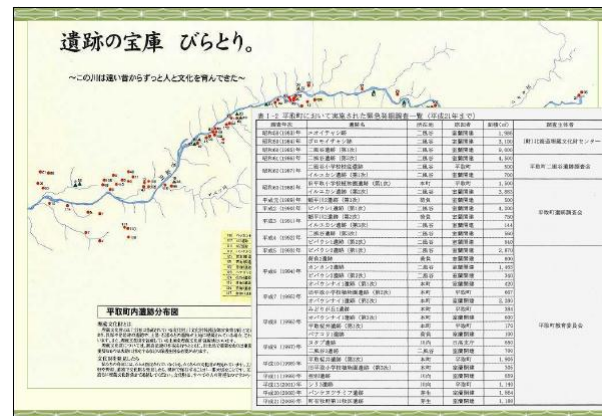
先住民考古学が論じられる過程の中で明らかとなってきたことは、考古学が調査研究を通して明らかにし、構築する歴史のイメージが現在を生きる先住民に直接影響を与えるということである。考古学の研究は、これまで意識されていた以上にそこに生活する先住民の歴史意識と深く結びつき、現在そして将来の権利回復活動に大きな影響を及ぼすのである。

* 加藤博文2012より

ICOMOS(国際記念物遺跡会議)が1999年に「International Cultural Tourism Charter(国際文化観光憲章)」で定めているように、ツーリズムとは経済活動であるとともに最も重要な文化交流の手段(the foremost vehicles for cultural exchange)である。つまりツーリズムとは、先人から受け継ぎ、次世代へ引き継ぐべき文化遺産(cultural heritage)の価値・重要性を、旅行者だけでなく、地域社会内外のあらゆる人々に、「現場での実体験、あるいは「知識」そして「感性面での親しみ・楽しみ」として、アクセス可能にするための手段なのである。

* 山村高淑2012より

◆加藤博文2012『先住民文化遺産と地域に根ざした考古学』先住民文化遺産とツーリズム：アイヌ民族における文化遺産活用の理論と実践』12-28頁北海道大学アイヌ・先住民研究センター
◆山村高憲2012『ヘリテージツーリズムと先住民民族観』先住民文化遺産とツーリズム：アイヌ民族における文化遺産活用の理論と実践』35-44頁北海道大学アイヌ・先住民研究センター

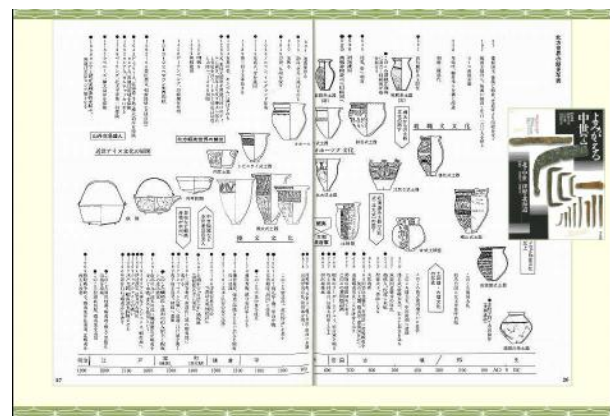


●平取町のイオル構想提言書『IWOR2002』より

III-9. 文化の保存・伝承とIWORネットワークの関わり(例(B))



【2】文化・歴史を活かした新しいプロジェクトの導因となったり、根拠づけとなったりする



●4 「アイヌ伝統文化の今日的継承」再考

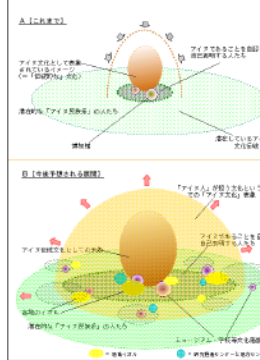


20世紀終盤から21世紀にかけての時期を、後世の歴史家はアイヌ民族にとっての「文芸復興＝ルネサンス（アイヌ語で表現されるべきだろう）」の時代であったと評価するようになるだろう。渦中にある人たちは、あるいは傍観者の立場にある人たちも、やや大げな表現、過大評価と思うかもしれない。しかし、1997年の「アイヌ文化振興法」制定・施行に象徴されるように、ここ数十年の間に、アイヌの人たちの民族としての復興運動は、かつてない広がり、深まりをもって進んだ。単純化を恐れずに言うならば、否定から肯定への、抑制から発露への、圧迫から促進への、差別から尊重への、あきらめから希望への、同時代に生きる人々の価値観のドラステックな転換をともないながらこの歴史的過程は進みつつある。

町立博物館が掲げる運営の基本理念「アイヌ伝統文化の今日的継承」は、過去にたいする再認識の作業を進めながら、現在の変化しつつある諸条件をふまえ、未来への受け継ぎ方・活かし方を探るための統合的なプロジェクト、共同事業の目標でもある。その成否は、どれだけ関わる人々の輪を大きくし、意志を強く深いものにできるかに依っている。すでにその兆しは始まっているが、将来は都会におけるアイヌの活動が相対的には重みを増すであろう。しかし、アイヌ的な伝統は、非農業的・非都市的な狩猟・漁労・採取の生活に主な根拠をもっている。人々がその記憶を忘れずに受け継いでいく限り、二風谷のような土着性・歴史性を擁する地域に定着した博物館(群)の存在とその役割が、ますます重要度を高めるものと考えられるし、それに応えるための努力が続けられるであろう。

*吉原(米田)秀喜1999「平取町立二風谷アイヌ文化博物館の位置と役割」
スミソニアン博物館特別展図録AINU-Spirit of a Northern People-』(日本語原文)

■アイヌ文化の発展に資する多様なアイヌのイメージ(概念図)



■アイヌ民族の文化表象において
予想される変化のイメージ
(概念図)

◆収縮と拡大の、両方の力が錯綜しながら作用し続けているアイヌ民族をめぐる今日の社会状況、文化的な時空の中で、ミュージアムなどの施設やIOWR、あるいは文化景観・環境はどのような位置を占めるのか、どのような役割を果たさうのか(果たさせるのか)?

★シンポジウム2011《北方のツーリズムと景観》におけるコメント

⇒ ⇒ ⇒ ⇒ ⇒

＜The Dynamic Interaction between Tourism and Cultural Heritage＞
★ ICOMOS1999: INTERNATIONAL CULTURAL TOURISM CHARTERより

◆「ツーリズムと文化遺産とのあいだの相互作用を、どう制御するのか?」

●5 調査・保全対策におけるツーリズムへの対応

● As long as the Sarugawa River and the Ainu culture are



【ツーリズムの振興に関する基本的考え方】

～コミュニティベースなヘリテージツーリズムをめざして～

- ①文化面のインフラ・システム整備と人材育成を先行、あるいは連動させる。
- ②クラスター(房)の形成・成長を図る戦略手法で、漸次的に着実に拡充していく。
- ③自分たちの民族的・地域的流儀(スタイル)とペースを重視する。
- ④来訪者にコミュニティの取組自体、その構想とプロセスを理解・体感してもらう。
- ⑤「住民の主体的参画と行政・専門家との協働」をどの局面でも具現していく。

■アイヌ関係文化財をめぐる取組の推移

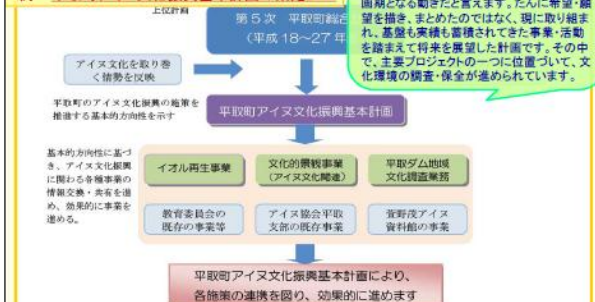
——平取地域の場合:1970年代より

- ▼1970年代 民族の歴史・文化に対する再認識
＜例＞ 二風谷アイヌ文化資料館の開館1972/二風谷イヨマンテ1977
- ▼1980年代「伝統を守り、未来に受け継ぐ」
＜例＞ アイヌ古式舞踊の国重要無形民俗文化財指定1984
ユオイチャシ・ボロモイチャシ・二風谷遺跡発掘調査1983～(報告書)1986
- ▼1990年代「アイヌ伝統文化の今日的継承」
＜例＞ 平取町立二風谷アイヌ文化博物館の開館1992/二風谷ダム裁判判決1997/アイヌ文化振興法制定・施行1997/沙流川歴史館開館1998
- ▼2000年代「アイヌの人たちをはじめとする地域住民の主体的参画と専門家との協働」
＜例＞ アイヌ文化環境保全調査2003/イオル整備事業の着手2008
- ▼2010年代「アイヌ文化継承・振興の展開と深化」
＜例＞ 平取町アイヌ文化振興基本計画の策定2010
町内国有林に関する「21世紀・アイヌ文化伝承の森」プロジェクト始動2012

※現代のアイヌ民族・文化をめぐる動きの各時期に、先駆的な取組事例を提示してきた。

■平取町アイヌ文化振興基本計画の位置づけ

▼2010年代「アイヌ文化継承・振興の展開と深化」
＜例＞ 平取町アイヌ文化振興基本計画の策定2010



※「平取町アイヌ文化振興基本計画」(平取町:平成22年3月)より

■「協働」のスタイル = 調査室<プロジェクトSAR=サウ>を例に ①

※『北海道平取町文化の景観保護施設事業第2次年度報告書2007』より→明治期の沙流川下流域におけるsar

Study of Ainu culture and Rivers
＜アイヌ文化と河川(および流域sar)に関する研究＞

▼「展開と深化」のための取組の例を紹介。調査・保全に関してご指導をいただいている専門家の一人、辻井達一先生の植物生態学、湿地・河川の調査を支援させていただきます。

